

大官大寺下層遺跡の縄文式土器

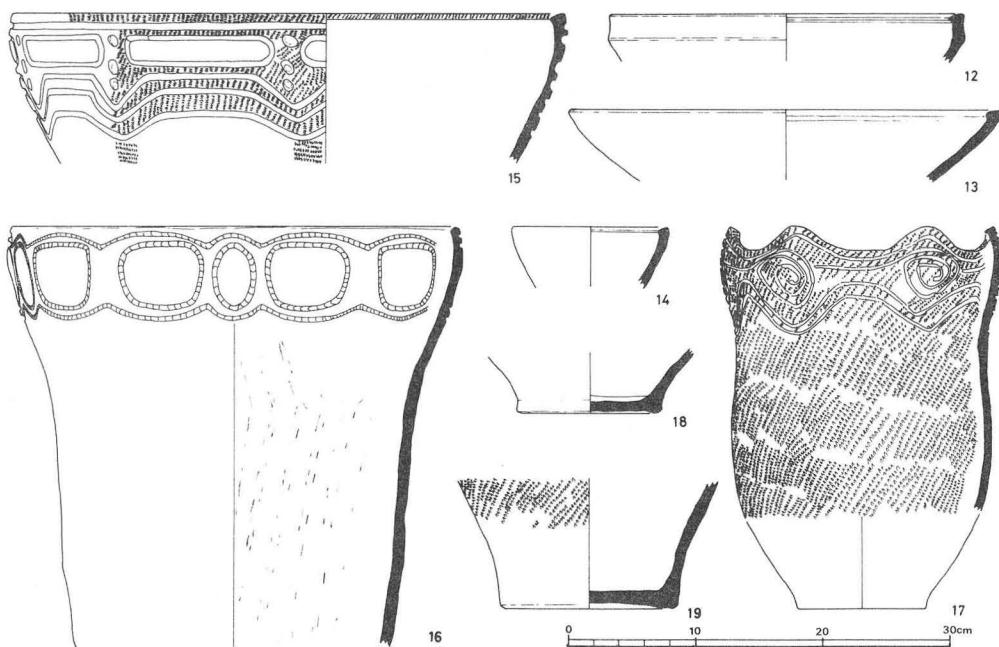
調査概要において触れたように、大官大寺跡はまた大和では数少ない縄文時代の遺跡である。これまで出土した土器群は縄文時代中期から後期初頭、および後期末の宮滝式の時期に属する。今回は中期から後期初頭の土壙を数基発掘し、良好な土器群を得たのでその一部を紹介する。

SK320 (1～3, 8～10, 12～19) 深鉢はいわゆるキャリパー形深鉢が多く、文様は太い沈線によって枠状文や渦巻き文様、あるいは短い弧状沈線を幾段も重ね、その後に節の大きい縄文を施文する。1～3は口縁が波状を呈し、1は口縁部の枠状文を押引き手法によって描く。2は波頂部の渦巻き文の下方に円形竹管の刺突を加える。17は小波状口縁の深鉢。口縁部は連続する2条の弧状線によって区画し、内部に渦巻き文様をいれる。その後器面全面にLR縄文を施文する。文様単位は6に復原できる。口径20.6cm、現高23cm。以上の縄文地の土器はみな口唇部を縄文帯とする。16は押引き手法の沈線によって文様を構成する。浅鉢は12～14がある。いずれも無文で器面をよく磨く。この土壙の土器は全体に明褐色を呈し、胎土は粗く金雲母を含む。

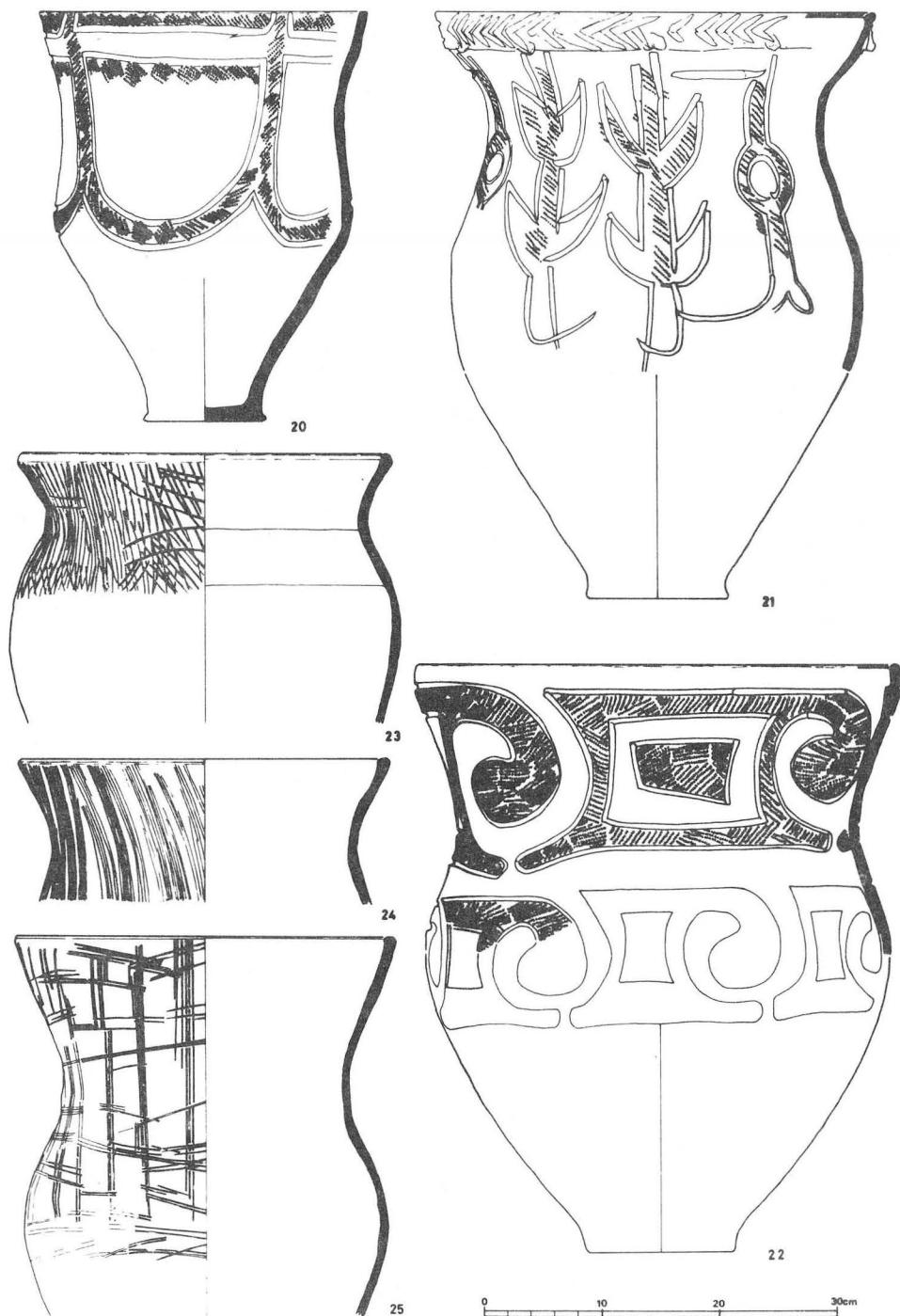
SK315 (22) いわゆる中津式の範疇に含められる口径40～41cmの大型深鉢。口縁部の約3/4が出土。文様単位は口縁部は4、胴部は7に復原できる。明褐色を呈し、胎土は粗砂を含む。推定講堂SB100下層出土の20は同じ時期の所産であろう。

SK313 (23) 口縁が外反し、胴部にふくらみをもつ深鉢。口縁部から胴上位に斜向条線を施し以下無文とする。条線はヘラ状工具によって1条ずつ引く。口縁を下にして埋没していたため、底部を欠損。口径31cm、現高24cm。

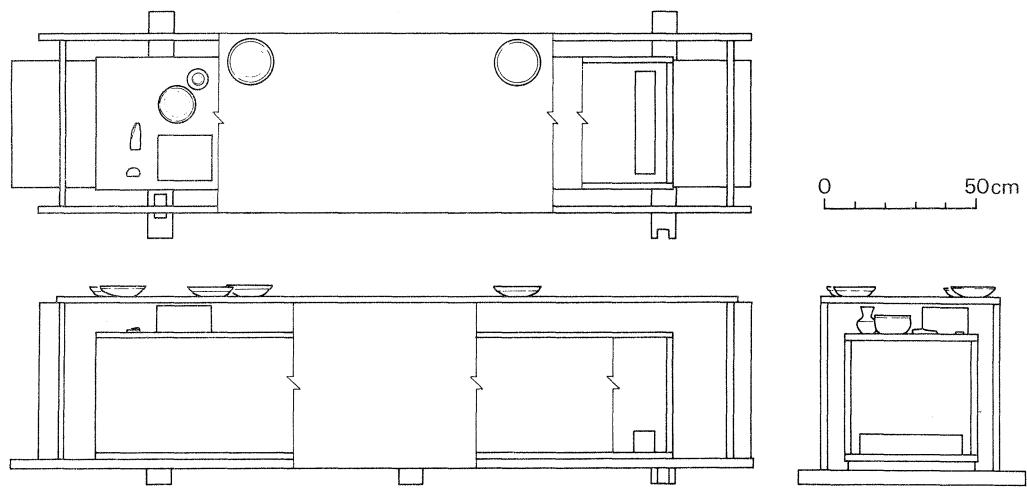
包含層からも特徴ある土器が出土している。7は直立した波状口縁がくの字状に屈曲する東日本的な深鉢。胎土は精良で堅く焼き締り、内外面ともよく磨く。11は瀬戸内地方の里木Ⅲ式に類似した胴部破片。21は口縁の帯状区画を矢羽状に沈刻し、下端の貼り瘤を起点に錨状文様と円圏様の文様を懸垂する。



縄文式土器拓影・実測図 (1/6) 1～3, 8～10, 12～19—SK320
その他は包含層



縄文式土器実測図 (1/6) 22—SK315, 23—SK313
20・25—SB100 下層



平吉遺跡・木棺基SX16復原図（1/25）